

令和8年度 文教厚生常任委員会視察報告書

委 員 会 名	文教厚生常任委員会(委員長 須崎 和貴)
視 察 期 間 等	令和8年6月29日(月) ～ 令和8年7月2日(木)
視察場所・対応者	(1)長野県塩尻市 対応者 ・塩尻市立檜川小中学校 教頭 百瀬 公則 氏 ・塩尻市議会事務局 係長 古畑 千穂 氏 ・塩尻市市民交流センター長・塩尻市立図書館長・吉田晁記念館長 清水 隆朝氏 ・塩尻市役所交流文化部 市民交流センター市民活動支援係 主任 唐澤 敏樹氏 (2)長野県飯田市 対応者 ・飯田市議会 議長 竹村 圭史 氏 ・飯田市議会 議員 下平 恒男 氏 ・飯田市教育委員会 飯田市公民館 副館長 小林 和弘 氏 ・飯田市公民館 学習支援係 西 しのぶ 氏 ・上久堅公民館 主事 林 舞歩 氏 ・上久堅公民館 文化委員長 北沢 昌子 氏 ・食工房 十三の里 長沼 昭子 氏 ・竜丘公民館 館長 羽生 武彦 氏 ・竜丘公民館 主事 吉川 隆志 氏 ・竜丘公民館 文化委員長 下平 光博 氏 ・竜丘公民館 文化委員 中島 進 氏
視 察 項 目 (テ ー マ)	(1)「市立檜川小中学校」「市民交流センターえんぱーく」の視察について (2)公民館大会の実施などの公民館活動について
視 察 委 員	須崎 和貴、鈴木 一彦、本田 俊治、富川 歩、永洞 均、阿部 秀子、工藤 勝代、保坂 いづみ
視 察 内 容	別紙のとおり
所 感	別紙のとおり

文教厚生常任委員会 令和８年度行政視察

（１）長野県塩尻市立檜川小中学校

①視察の概要

「木曽檜川小学校」と「檜川中学校」が統合・再編され、令和４年４月にスタートした長野県塩尻市木曽平沢にある公立の義務教育学校。主な教育方針・特色は、前期課程（１～６年生）から英語・算数・理科・体育などで専科教員による指導や隣接する「奈良井宿」の国際観光の特色を踏まえ、オーストラリアの学校とオンラインで交流するなど英語教育に力を入れている。１学級の上限を抑えた少人数制を実施しており、児童・生徒一人ひとりに寄り添ったきめ細やかな指導を行っている。また、塩尻市内の他学区からも通学を受け入れる「小規模特認校制度」を導入している。檜川地区は「奈良井宿」や伝統工芸「木曽漆器」で知られており、地域の伝統産業・歴史を生かしたふるさと学習では、「ふるさと漆器学習」として、伝統工芸士の指導のもとで漆塗り体験を行っている。また「ならにこ漆器会社」という子ども会社を立ち上げ、制作した漆器のPRや実販売を企画・運営する、キャリア教育に取り組む。コミュニティスクールの取り組みとしては、地域ボランティアによる授業支援や体験活動、課外活動（「なららクラブ」など）を展開している。豊かな自然環境（川・山林）を活用した学習や、先述のオーストラリアの学校との交流など英語教育は、国際観光地としての地域の願いに基づくものである。通学区域を越えた入学が認められる「小規模特認校」として、１学年１０人規模を募集しており、当市では歯舞学園と同規模。今後の市街地校の義務教育化等を見据え、視察を実施した。

②視察対応者

塩尻市立檜川小中学校 教頭 百瀬 公則氏

塩尻市議会事務局 係長 古畑 千穂氏

③視察の様子



④委員の所感

委員長：須崎 和貴（会派 紬）

郷土の文化である「漆器」の制作や「奈良井宿」に隣接していることから、地域との連携や地域住民の思いが反映された教育活動を実践している学校であった。木材を基調とした校舎は、県内でも夏でも比較的気温が低めであることから快適に感じ、コミュニティスクールで活用する「C S ルーム」やフリーアドレス型の職員室、校長室を「B S（ボス）ルーム」と称する配置が特徴的と言えよう。これらは令和6年度に視察した「安平町立早来学園」にも通ずるところがある。学校図書館については、増築部分であり、他の棟とはちがう明るさがあった。檜川小中学校に限らず、昔から塩尻市では各学校に学校司書を配置している。児童

生徒数の状況は全72名のうち9割が檜川地区で、校区外通学が3%（2名）、小規模特認校制度を活用しているのが7%（5名）であった。根室市においてもインクルーシブ教育推進特認校制度を設けており、子どもたちの主体性、地域との連携、市街地からの通学距離等（檜川小中学校の場合はバスを基本として電車通学もあり）という共通点が多いが、檜川小中学校以外の学校は義務教育化されておらず、あくまで比較的小規模校の特性を活かし、学校へ通う選択肢を増やしている取り組みと捉えられる。また、「感じる」「語り合う」「考える」の3つをコンセプトとし、「一人ひとりの育ちに丁寧に向き合う」塩尻市の教育理念と所謂子どもたちの主体性を育む教育活動に取り組んでいるが、「職員室への入り方チェック」表などに見受けられるようにある程度「躰」という部分や、日課表の自由度もある程度固めているという面があり、ここは同じような教育理念でも地域文化のちがいが表れているのではないか。

副委員長：鈴木 一彦（日本共産党根室市議会議員団）

学校の特色としては、コミュニケーションを重視した実践的な英語教育、小規模校ならではのきめ細やかな教育、地域と共に学ぶふさと学習・キャリア教育などが挙げられると思う。英語教育は、近隣に国際的な観光地＝奈良井宿があることから、現地に赴き、海外からの旅行客の皆さんと触れ合うなど、より実践的であると感じた。また、ふさと学習で取り組む、地域の伝統的工芸品＝木曾漆器制作では、自ら作成した食器（箸、椀、お盆など）を給食に使用することで、食育の効果を高めているものと考ええる。

余談であるが、塩尻市の学校給食は、すべて自校方式であることに驚くとともに、教育効果を考えたときに、ベストな選択であると感じた。

授業の様子を見学させていただいたが、まさに小規模校ならではのきめ細やかな教育を実感した。あわせて、地域とのつながりの強さも感じさせられた。

根室市で言えば、花咲港小学校が義務教育学校に向かう中で、小規模校であることのメリットや地域とのつながりなど、大いに参考にすべきである。同時に、仮称花咲港義務教育学校の目指す姿が個々にあると感じたところである。

委員：本田 俊治（市民クラブ）

- ・平成 19 年 4 月 塩尻市立贅川小学校と塩尻市立櫛川小学校が統合、令和元年度、櫛川中学校と共に義務教育学校化の準備を進め、令和 4 年に開校。
- ・小規模特認校（学区外からの就学が認められ、小規模校の教育的特色を生かして児童生徒を広域に受け入れる制度）であり、塩尻市内のすべての子どもが入学でき、現在生徒数は 72 名（地元 90 %、特認校 7 %、市外 3 %）。
- ・小規模校、義務教育学校でありきめ細やかな学び、道徳的アプローチを目指している。
- ・コミュニケーション重視の英語教育を小学校 1 年生（総合学習の枠組みの中で）から行っており（9 か年の学び）、オーストラリアやイギリスとのオンライン学習にも取り組んでいる。
- ・学年の枠を超えた教育、地域と共に学ぶ教育として、地域に学ぶキャリア教育、ふるさと学習を行っており、地域産業である漆器づくりを学ぶ「ふるさと漆器学習」を行っている。
- ・PTA 活動については、PTC（コミュニケーション）A 活動として、地域との関係性を大切にしており、LINE も活用、放課後の部活動は卓球、吹奏楽のみで、他のクラブ活動は地域の方々が指導を行っている（部活動の地域移行、CS 活動がすでに行われている）。
- ・職員室は、管理職を除きオープンスペース（フリー）となっており、小学校、中学校の先生方のコミュニケーションが充実、連携も進んでいる。
- ・児童生徒、先生方一緒に食事ができる大きなランチルームがあり、その奥に給食調理室が設けられていました。また、生徒が使う食器類はふるさと漆器学習で制作された漆塗りのものが使われていました。



ランチルーム



漆塗りの食器

※根室市においても、現在、市内すべての学校の義務教育学校化が進められており、子どもたちの学びのあり方、学校を選べる仕組みの考え方が大変参考になりました。また、地域と共に学ぶふるさと学習の考え方も参考になりました。
 ※根室市は学校給食設備のセンター化、民間委託を想定して準備が進められていますが、地域の皆さんが支え、食育を意識した塩尻市の取り組みも大切と感じました。

委員：富川 歩（創志クラブ）

校舎が地元のヒノキ材などの木材をふんだんに使用した木造建築で、北海道では見ることができない素晴らしい校舎に圧倒されました。

小中一貫の義務教育学校で約100名が学んでいました。地域の伝統産業の木曾漆器を学ぶ教育を行い、給食などに使う食器やお盆などに漆塗りなどの体験学習を行い、少人数クラスを活かした特色ある教育環境が評価されていた、根室市のインクルーシブ教育と同様に互いを認め合う教育を行っていました。

委員：永洞 均（創志クラブ）

塩尻市内すべての小中学校（小学校8校、中学校5校、義務教育学校1校）で校内調理の「自校給食」を基本としており、全校に栄養士を配置して、地元の

新鮮な食材を活かした作りたて!!の給食を提供している。

地産地消（地元農家からの材料購入）、食育の推進、各校オリジナルメニューの取り組みをしている。

全国的には合理化の名のもと、給食センター化が多数を占めるが、各学校への給食施設の設置は、本来あるべき姿であると感じた。

少子化による教育予算自体が減少している中で、コストはかかろうとも、子供たちのためには良い決断をしたと思う。

委員：阿部 秀子（市政クラブ）

長野県塩尻市檜川地区に位置する檜川小中学校は、宿場町・奈良井宿近くの豊かな自然に囲まれた小規模特認校であり、義務教育学校として五年目を迎えている。

塩尻市が掲げる「一人ひとりの学びや育ちに寄り添う丁寧な指導」や「子ども同士のかかわりを活かした学習活動」を学校全体で体現しており、少人数ならではのきめ細やかな教育が展開されている。市内中心部から約三十分を要するため、児童生徒はスクールバスや電車で通学しているが、広い校舎や体育館、プールなどの設備が整い、自然と調和した落ち着いた環境の中で子どもたちはのびのびと過ごしている。休み時間には蝶を追いかける姿も見られ、地域の自然が日常の学びと生活に深く溶け込んでいることが印象的であった。

学習面では、小学一年生から専科教員が授業を担当し、専門性の高い指導が行われている。英語教育にも力を入れており、オーストラリアの学校とのオンライン交流や、外国人観光客へのパンフレット配布、京都での地域PR活動など、実践的な国際交流の機会が豊富である。英検にも積極的に取り組んでおり、視察時には低学年の児童が明るく挨拶を交わす姿が見られ、国際感覚やコミュニケーション力が自然に育まれていることを感じた。

給食は自校給食で、地域の新鮮な食材を活用した地産地消を推進している。栄養士が常駐し、食育マナーや健康教育を丁寧に行っている点も特徴である。特に、地元産業である木曽漆器を給食の食器として使用していることは大きな特色であり、壊れにくく丈夫な漆器を日常的に使うことで、地域文化への理解が深まっている。さらに四年生の「ふるさと漆器学習」では、児童が自ら漆塗りしたお盆を給食で使用し、伝統文化への愛着や誇りを育む取り組みが行われている。

地域との連携も非常に活発であり、地域コーディネーターが中心となって、公民館での川遊びや林での木を切るネイチャー活動、放課後の将棋・料理・ボールパークなど、多様な活動が展開されている。地域住民が講師として関わることで、児童生徒の学びの幅が広がるだけでなく、教員の働き方改革にもつながっている。これらの取り組みは、根室市北斗小学校で行われている活動とも共通点が多く、地域と学校が協働して子どもを育てる姿勢に強い共感を覚えた。

部活動については、土日の活動を休止し、地域が支える仕組みを導入している。また、小中合同の職員室では教員の席を固定せず、コミュニケーションを促進する工夫がなされており、教職員同士の連携が自然に生まれる環境が整えられている。

今回の視察を通して、檜川小中学校は自然・地域・文化・国際交流が一体となった学びの場であり、子どもたちの心の豊かさや主体性を育む環境が非常に充実していると感じた。

九年間をこの環境で過ごすことは、児童生徒にとって大きな財産となる。地域と学校が協働しながら子どもを育てる仕組みは、根室市の教育にも応用可能であり、今後の学校づくりや地域連携の在り方を考えるうえで多くの示唆を得る視察となった。

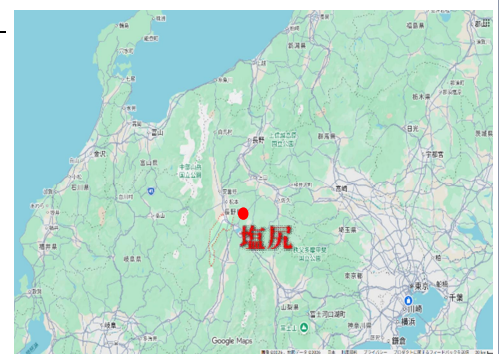
委員：工藤 勝代（市政クラブ）

基本情報： 塩尻市 人口 64,757 人（R8 年 5 月 1 日現在）

視察先説明： 檜川小中学校は小規模特任校として 80 人を超える生徒数があり今後の根室市内の義務教育学校化の参考になると考え視察を行った。義務教育学校化するにあたっては、住民アンケートを取り義務教育学校となった点も注目した。

小規模校ならではのきめ細かい教育や、地域の観光資源を使い、伝統工芸の技術を学ぶキャリア教育を行っており、根室市内における産業を通したキャリア教育の参考になると考える。

檜川小中学校では、生徒確保のため、学校長自ら市内の保育園に出向き説明を行っている。



【特徴】

英語教育

小学校1年生から英語教育を取り入れており、オーストラリアの学校とのオンライン授業や、外国人観光客に向けた案内体験、パンフレット作り等実践的な英語教育に力を入れていた。修学旅行では京都の外国人観光客に向けて英語で地域のPR活動なども行っている。

キャリア教育

伝統産業としては（木曾漆器）の主力生産地でもある。子どもたちは地域の産業である漆器類の作成、塗り、維持、補修など技術を学び、9年間自分の作った木曾漆器のお盆を大切に使う。愛着も生まれるし、地域の産業への誇りともなる活動であると思った。また、学校の近くに伝統的な文化と歴史を残す宿場（奈良井宿）があり外国人観光客にむけての英語での観光案内等で活かす（実践する）取り組みを行っている。

2024年に全校生徒で敷地内にウルシの木を植えた。漆がとれるまでは10～20年かかるがいつか後輩に漆を取り使ってもらいたい、未来につなげる取り組みとしてスタートした。「育てる漆器プロジェクト」
地域の青年部が企画

＊＊長期的な実践的キャリア教育プラン＊＊

1年～3年 地域の歴史伝統を知る

3年～6年 漆塗学習 地域の伝統工芸から塗りを学ぶ

6年～地域の職人の協力等によって作成した漆器を独自で販売する“ならにこ漆器会社”を運営販売店舗は「無印良品」「木曾くらしの工芸館」、道の駅、学校祭、等

8年～9年 地域の歴史・文化を探訪し、檜川地区の課題解決を地元の方と共に学ぶ。

9年～奈良井宿で町おこし活動「江戸ウイン」英語での案内練習、観光協会とのイベントづくり。

根室市の参考になる点について

- * PTA活動とは言わず、PTCA活動と呼び、地域の方と保護者が学校活動と一緒にを行うのが基本となっていた。根室市はPTAとCSと別れているのでPTCAを根室市のヒントにしたい。
- * 各学校に給食調理場があり、特に「地域の考えでセンター化はしないと決め地域食材を多くとり入れた給食を目指す」となっており、食育を推し進める考えが通せている地域であること。
- * 給食食器も漆器を使用、また、給食に使用するトレイ（お盆）は熟練の塗師た

ちの指導のもと、木地から漆を塗って仕上げ、毎年1回傷のメンテナンスの塗り直しを経験し愛着と伝統工芸の技術を知ることになり、卒業と同時に自分のものとして記念に贈呈されるそうで、9年かけて伝える丁寧なキャリア教育に感動した。

* 木造建築の校舎も地域から残してほしいという声を受けてR4年に修繕し義務教育学校となった。

委員：保坂 いづみ（無所属）

梶川小中学校は、国際観光地である奈良井宿にほど近く、コミュニケーションを重視した実践的な英語教育で有名である。

梶川小中学校の概要などについて、まずは、同校の百瀬公則教頭からお話をうかがい、続いて、各自校内の見学をすることになった。

当議員は、4年生の国語の授業を集中的に見学した。

その日の授業は、当議員も小学4年生のときに学習した「一つの花」の学習だった。当職が小学4年生のときとは異なり、授業では、パソコンを使い、児童たちは当然のように使いこなしていた。

また、教諭の指導は、指導書どおりのものではないことがうかがわれ、教材研究を尽くしたもののような印象を受けた。百瀬教頭にこのことを聞くと、長野県は教育県であり、教材研究も熱心になされており、指導書どおりの通り一遍の授業でないのは、特別のものではないとのことであった。

校内の見学では、児童がよく挨拶をしていたことも印象に残った。百瀬教頭にこのことを聞くと、英語教育の影響ではないか、とのことであった。

（２）長野県塩尻市市民交流センター「えんぱーく」

①視察の概要

「えんぱーく」は、ＪＲ塩尻駅近くに位置する多機能型の複合施設。中心市街地の活性化と新たなコミュニティ形成を目的に、旧塩尻駅前大門中央通り地区の再開発事業の一環として建設された。基本コンセプトは「知恵の交流を通じた人づくりの場」。世代や立場を超えた多様な人々が集い、活動や知恵を共有・交流することで、新しい価値や人との結びつき（縁・円）を創出することを目指している。施設内には、それぞれの目的を持った５つのエリア・機能が組み合わさっており、互いに連携（融合）したサービスを提供している。以下、５つの機能をまとめる。

- ・塩尻市立図書館：ビジネス・子育て・ワイン・短歌コーナーなど地域特性に合わせた独自の蔵書構成が特徴。
- ・子育て支援・青少年交流：未就園児と保護者が交流できる「子育て支援センター」や、中高生など若者が集える空間を用意。
- ・シニア活動支援：高齢者の生きがいづくりや知恵の継承、地域参加をサポート。
- ・ビジネス支援：商工会議所、中小企業相談所、コワーキング等を併設。
- ・市民活動支援：地域のＮＰＯやボランティア、サークル活動のための作業スペースやミーティング環境を整備。

建築・空間デザインの特徴としては、「壁柱（かべばしら）」による約１００本の薄いコンクリートの壁柱が建物を支えており、壁柱がゆるやかに空間を区切ることで、壁で完全に仕切らない「開かれたワンルーム」のような空間を実現している。ガラス張りの外観や吹き抜け構造を採用し、館内のどこにいても自然光が入る明るい設計となっており、施設名の通り、誰でも気軽に立ち寄れる公園のような場を目指している。複合化を基本とした将来的な公共施設のあり方について情報収集するため視察を実施した。

②視察対応者

塩尻市市民交流センター長・塩尻市立図書館長・古田晁記念館長 清水 隆朝氏
塩尻市役所交流文化部 市民交流センター市民活動支援係 主任 唐澤 敏樹氏

③視察の様子



④委員の所感

須崎委員長

合併特例債の活用（総事業費約51.6億円）や「大門中央通り地区市街地再開発組合」が建設を担うなど、整備に至る経過等は令和6年度に視察した酒田市の複合施設と同じような考え方が採用されていると感じた。図書館機能にビジネス・子育て・シニアや青少年の市民活動を掛け合わせ、必要な情報収集に図書館が活用できるといった相乗効果を狙った施設である。合わせて担当職員から説明があった「現場主義」の考え方から、市役所機能が必ずしも集約されているわけではなく、交流拠点であるえんぱーくに経済分野が配置されているなど、関連性の深い場所に行政部署が存在している。柱ではなく、壁柱というデザインが採用されており、その壁に創作物を使用料を収めることで一定期間掲示が可能である。また、全体的に使用料は低く抑えられており、「使ってなんぼ」という

考え方が窺える。図書館施設は、書棚の間隔が広く設定されているほか、映像作品も書籍と同じく置かれており、利用者側の利便性がよく考えられている。さらに、視察時には「保護司」について理解を深めるための作品紹介が置かれており、定期的に他部署との連携によるコーナーが設置されているようである。野生動物の件やジェンダーなどの特定分野でのコーナーは当市でも同様に取り組んでいるが、複合施設という人が集まりやすい場所で展開していると効果も高いだろう。

鈴木副委員長

中心市街地活性化策として、図書館を核とした複合施設建設計画が具体化し、実現した施設。特筆すべきは、計画の前段階から開館までの間（平成 15～22 年）に、市民を交えた「ワークショップ」や「飛び込み市民会議」などが、200 回以上開かれ、延べ 3,817 人の市民が参加していることである。市民にとって、大変身近な施設となっている。

施設は公設公営、公設民営等ではなく、公設市民営を目指しているが、開館に合わせて作られたサポート組織「えんぱーくくらぶ」については、ほぼ活動を停止しているなど課題も多い。

複合施設をつくるにあたって、図書館を核としていることに注目。以前視察した酒田市の複合施設も図書館中心。

図書館は、もちろん本を読んだり借りたりする施設であるが、なんとなく気軽に行けるところであると思う。例えば、根室市の総合文化会館は、会議、サークル活動、催し物への参加など、目的を持って訪れる施設である。そうではなく、気軽に、一人でも立ち寄れる図書館を核とした複合施設にすることによって、市民の交流が広がる施設になるものと考ええる。

根室市の図書館は老朽化が著しく、現在の建物を抜本的に改築するのか、それとも新築するのか、判断が求められる。「根室市公共施設グランドデザイン構想」（以下「構想」）によると、図書館は、現在の総合文化会館の周辺敷地に移転するとなっている。そこに複合化の視点はない。「構想」からは外れてしまうが、図書館を人が集まるツールとして、あるいは中心市街地活性化のツールとして、複合施設を視野に入れながら検討していく必要があると考える。

本田委員

- ・平成15年から約8か年をかけて市民が参加する会議が行われ、施設整備計画が策定され、建設着工、そして、施設オープンを迎えた市民交流センターです。
(会議は200回、延べ4000人もの市民が参加)
- ・総事業費 約50億円、交付税算入のある合併特例債を活用。施設全体の9割を市が購入、1割は民間企業等が使用。
- ・施設運営面の特徴としては、図書館以外は飲食が自由(5Fのイベントホールはアルコール可)、駐車場は6時間無料(市営駐車場450台)、市役所支所機能(住民票等の発行)、区分により官民が所有・管理。
- ・施設の基本コンセプトは、「知恵の交流を通じた人づくりの場」。役立つ情報の提供、意欲と活動の応援、進化を目指す姿・実現することも目指す施設。
- ・図書館機能を最大限に活かし、図書館、シニア活動、ビジネス、子育て、青少年交流、市民活動を重点分野とし、各分野の図書の紹介、情報収集、その活用講座等図書館機能と融合したサービスを提供。
- ・公設市民営を目指し、協働による運営の仕組みとしてサポート組織「えんぱーくらぶ」を平成21年2月に設置。個人・市民団体がこの組織にサポーター登録して、得意・関心分野に分かれ活動することとし、開館準備から開館後の活動を支えた。しかし、各団体の活動を推進する役割に加え、「えんぱーくらぶ」の運営と負担が多く、平成28年度末で、その活動を市へ移行。サポーターポイント制度や継続しているサポート活動も残っている。
- ・現在の市民交流センターの委託事業・補助制度として、市民営提案委託事業、市民活動支援業務委託、まちづくりチャレンジ補助事業が行われている。
- ・施設の利用状況としては、開館後、年間60万人台で推移、コロナ禍で落ち込むも、50万人台に回復、令和6年度大規模改修を実施。開館後の延べ来館者は、869.1万人、令和6年度までの施設視察者延べ15,371人。
- ・図書館機能について
床面積：3286 m²
職員数：36人(正規職員6人、会計年度I種17人、III種13人)
図書収容能力：49.5万冊
分館：8分館(小学校区ごとに支所に併設 蔵書数は8千冊から2万冊)
※図書館蔵書管理システムは統一したものを利用、各図書館の蔵書確認可(確

認)

貸出数：毎年度約 70 万冊 2024 年 543,022 冊 市民一人当たり 8.2 冊
指標の全国的な位置（人口 6 万人以上 8 万人未満の市区）で蔵書数 8 位、
貸出数 6 位

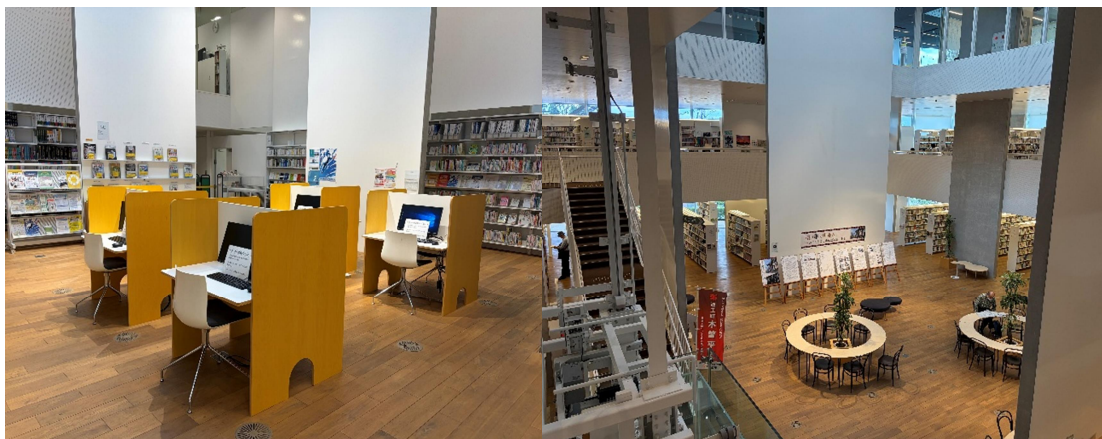
評価：Library of the Year 2015 優秀賞

地方創生レファレンス大賞 2017・2018 受賞

図書館の目指すべき目標・活動等：資料との出会いの多い図書館、進化する図書館に向けた組織体制、利用者の満足度を満たす接遇、積極的な情報発信、重点事業としての本の可能性を考える「信州しおじり本の寺子屋」、「信州しおじり子ども本の寺子屋」等

※時間をかけて市民が参加し整備計画が策定され、コンセプトを明確にして整備された市民交流センターであり、図書館機能を中心に市が全体の 9 割、会議所、民間が 1 割を利用、管理組合もあり、補修費用等の積立も行っています。

※5 階建ての施設で、1 階：図書館、子育て支援センター、2 階：図書館、交流エリア（会議室、ICT ルーム、総合受付、共同オフィス、パソコンコーナー等）、3 階：交流エリア（多目的ホール、会議室、音楽練習室、食育室、授乳室等）、4 階：市（観光プロモーション課、商工課）、塩尻商工会議所、歯科クリニック、ハローワーク、NPO 法人、民間企業等）、5 階：イベントホール、歯科医師会、テレビ松本ケーブルビジョン塩尻支社、民間企業等となっており、3 階には市営駐車場（450 台）との連絡通路があり、市民のおもいが詰まった施設です。



図書館内の PC

図書館内のオープンスペース等

※多くの市民がいつでも利用できる施設、中心市街地の賑わい創出機能が集約された施設、この施設の整備に多くの市民の声が反映され、建設準備段階、そして初期の施設運営にも多くの市民が関わる、市民参加型の施設整備・運営の考え方が大変参考になりました。根室市においても、今後、グランドデザインに基づき、北斗小学校、花咲小学校跡地の利活用、駅前の再開発の推進検討を行っていかねばなりませんので、塩尻市のこの中心市街地の賑わい創出の取り組みを参考に、市民参加、民間活力を取り入れた、計画づくりに取り組むべきと考えました。

富川委員

図書館を中心として、学びを深める様々な部屋やスペースが用意されていて、子育てや市民の交流に利用されていました、ビジネス支援で商工会議所やハローワークもあるので非常に便利に利用でき、多目的ホールと音楽練習室などは音楽活動を行う市民にとってありがたい施設と思います。

図書館が老朽化している根室市も「えんぱーく」のように多くの市民が多目的に利用できる施設が良いと思います。

永洞委員

図書館、行政機関等が同居する複合施設

これまで文教厚生常任委員会で視察した酒田駅前交流拠点施設「MIRAINI」、会派で視察したくろべ市民交流センター「あおーよ」と同様のコンセプトの施設。

根室においても、図書館新築等の機会があれば、街中活性化を念頭にしているコンセプトを導入すべき先進事例。

阿部委員

・市民交流センター「えんぱーく」は、“知恵の交流を通じた人づくりの場”という理念のとおり、施設そのものがとても開放的で、15年前に建てられたとは

思えないほど近代的でした。地下から5階までの立体的な構造で、図書館を中心に、子育て支援、青少年支援、シニア向け事業、市民活動、ビジネス支援（民間施設）が一体となった複合施設になっています。これら5つの機能がうまく融合しており、子どもからシニアまで、誰もが利用しやすい工夫が随所に見られました。

市民の知恵や活動がサービス向上につながっているとのことで、日常のグループ活動を支えながら、大きなイベントにも発展させていく仕組みが整っています。その結果、利用者数や集客も非常に多いようです。

また、施設に直結した立体駐車場は450台収容で、6時間無料という使いやすさも大きな魅力です。根室市で例えるなら、図書館、文化会館、市役所4階の市民活動スペースなどが一つにまとまったようなイメージです。蔵書数が本館だけで43万冊、貸出数が72万冊余、図書館司書が17名いるという点も驚きで、本への情熱があふれる、とても活気ある市立図書館でした。

工藤委員

基本情報：「知恵の交流を通じた人づくりの場」として、老若男女が利用でき、市民が集える複合施設として、図書館を中心に様々な民間活動をささえる場となっている。

機能：図書館、子育て支援センター、民間カフェ・パン店、会議室、ICTルーム、フリーコミュニティールーム、協働オフィス、多目的ホール、学習室、音楽練習室、食育室、市観光課、市産業政策課、市先端産業推進室、観光協会、塩尻市商工会議所、ふるさとハローワーク、イベントホール、芝生広場、民間施設（まちづくり企業）などが含まれており、職員も常駐している。

塩尻市第6次総合計画（R6～14）の目指す都市像「多彩な暮らし、叶えるまち。田園都市塩尻」の中での、地域をよくする活動に取り組む人や組織を応援するという、目標にむけて大きな役割を果たす。重点分野は5つとしており、「子育て支援・青少年交流」「市民活動支援」「図書館」「シニア活動支援」「ビジネス支援」である。

【特徴】

図書館への思い

ガラス張りの広々とした空間を上手に使用して、読書から勉強、懇談、ビジネス

相談、子育て支援と幅広い世代が使いやすいよう配慮され設計された施設でした。特に、図書館は文化レベルの高さを感じました。蔵書はもちろんですが、図書館活動として「信州 塩尻本の寺子屋」「信州しおじり子ども本の寺子屋」「しおり部 Shio-Lib 高校生・大学生の図書館ボランティア」など、子どもや若い世代につなげる読書への導入活動。全国的に有名な著名作家の講演企画を年17名ほど集めて企画している「信州・塩尻本の寺子屋」、その動員数も近隣自治体の方も含め、毎年1000人前後集まるという状況である。塩尻市の図書館や読書を通した思いは市内のすべての小中学校の学校図書室に専任の司書を配置していることから強く感じられ、えんぱーくの図書館には司書17名が配置となっていたほか、滞在型の図書館を中核とした複合施設において先進的な取り組みを展開している自治体として岐阜市、大和市などと連携・協力していた。

管理運営には多様な分野が入っていることからサポート組織「えんぱーくらぶ」に所属する各団体が協働による運営をしており、団体の代表が集まる運営委員会が委託し予算を確保して運営されているほか、床の90%を市の所有としており、市の担当課3つ、観光協会、商工会議所、民間施設、企業が入り賃貸収入もある。

根室市の参考になる点について

* 図書館が本と出合う場所、知識を蓄積し、調べ物をする場所で完了するのではなく、図書館をきっかけに、まちづくりや、社会的事業、出会い、ボランティア活動、ビジネス相談、地域コミュニティの核となる役割を果たすべく、あらゆる配慮と機能がそろっていることがとても参考になった。

* 根室市図書館が新設される時期は未定であるが、小さい町だから小さい図書館で良いという発想から、図書館を核とした、文化活動、コミュニティ活動、事業支援、子育て支援、まちづくりにつながる建物にしていくことの重要性を感じた。

* えんぱーくは複合化されていながらも、読書好きが好む、図書館としての落ち着いた空間配置が上手で、また、小さい子を連れた方が良く訪れる図書館の絵本を選ぶコーナーの横に遊び場を備えた子育て相談室があり、気軽に相談しやすい工夫や、ボランティア活動団体専用スペースにおいては、率先して活動の場所を得ることで活発化できるなど、根室市に無い発想があった。

* 図書館と地域の書店の営業を圧迫しない工夫や連携もしており、書店の新刊宣伝チラシと図書館の通信が毎月発行されている。地域コミュニティを活性化させるアイデアを知ることができた。

保坂委員

「えんぱーく」は、図書館、子育て支援・青少年交流、シニア活動支援、ビジネス支援、市民活動支援の5つを重点分野とする複合施設である。「えんぱーく」の概要等については、塩尻市役所文化交流部市民交流センター市民活動支援係の唐澤敏樹主任からお話をうかがい、続いて、「えんぱーく」の館内の見学に移った。

ビジネス支援のフロアの4階では、ハローワークや商工会議所などが入居しており、シニア活動支援、市民活動支援のフロアの3階には、会議室や食育室などがあった。

ただ、どのフロアでも印象に残ったのは、フリースペースがかなり広くとられていることであった。中学、高校生などが宿題をしたり、主婦たちが休憩したりするには十分なスペースがあり、交流の場として、申し分のないものであると思われた。

（３）長野県飯田市「公民館活動について」

①視察の概要

市内には「飯田市公民館」のほか、20 地区それぞれに独立した「地区公民館」が並立して配置されている。中央公民館が地区公民館の上位指導機関として命じるのではなく、各地区公民館が対等な立場で地域の特性を活かした独自事業を展開している。地区公民館の下には、さらに集落単位（集落・町内）を基本とした「分館」が配置されており、各地区公民館には、文化・体育・広報・青少年育成などの専門委員会が設置され、行政任せにするのではなく、地域住民自らが専門委員となり、事業の企画・運営・実施までを主体的に手がけている。飯田市では行政の若手職員が地区公民館の「主事」として地域に配属される。職員が地域住民の中に飛び込み、ともに汗を流して課題に向き合うことで、市役所と地域の質の高い協働関係を培う場にもなっている。こうした飯田市のまちづくりの精神は、山間部農村の歴史とともに、自ら～しようとする「ムトスの精神」、共同労働の田を意味する「結の心」（飯田の語源と言われる結い田にちなむ）が基礎としてあり、合併を繰り返す中で市民の役割を自治基本条例で制定、ボトムアップ型の地域自治組織を築いてきた。行政（職員）は支える側に徹し、財政的には「パワーアップ地域交付金」制度（20 地区に年間総額約 1 億円）を導入することで支援している。飯田市の公民館は、こうした住民主体の運営と「楽しい」をつくる公民館を重点目標として、「ハマコミのサイクル」という対話を通して人がつながり、共に活動を行うことで仲間づくりや協働が広がる公民館活動を実施している。今回は実際に、上久堅公民館と竜丘公民館の活動を伺うとともに、まちづくり委員会に携わっている方々のお話を直に聞くことができた。また、当市の社会教育とまちづくり講座で講演をいただいている牧野 篤氏（東京大学名誉教授・大正大学教授・文科省中教審委員）からも社会教育・公民館活動の先進地として推されており、今回の視察につながった。

②視察対応者

飯田市議会 議長 竹村 圭史氏

飯田市議会 議員 下平 恒男氏

飯田市教育委員会 飯田市公民館 副館長 小林 和弘氏

飯田市公民館 学習支援係 西 しのぶ氏
上久堅公民館 主事 林 舞歩氏
上久堅公民館 文化委員長 北沢 昌子氏
食工房 十三の里 長沼 昭子氏
竜丘公民館 館長 羽生 武彦氏
竜丘公民館 主事 吉川 隆志氏
竜丘公民館 文化委員長 下平 光博氏
竜丘公民館 文化委員 中島 進氏

③視察の様子



④委員の所感

須崎委員長

ここ数年、根室市の社会教育や公民館事業に助力をいただいている牧野 篤大

正大学教授（東京大学名誉教授）の講演で紹介があったまちで、市内20の地区にある公民館を核に（さらに集落ごとに分館がある）まちづくり委員会が組織され、住民が主体的に文化祭や二十歳の集いを催すなど、根室市では行政が主導している部分を「住民が取り組むもの」としている文化が根付いている。もともと中山間部に位置している飯田市は、封建時代に領主の入れ替わりが多く、集落ごとの連帯や自治が育まれてきた地域である。北海道の開拓の歴史によるまちの成り立ちとは大きなちがいがある。訪問した竜丘公民館の羽生館長もその点を指摘されていた。各公民館で若干組織のちがいはあるが、先述の通り20の地区に公民館があり、行政窓口となる「自治振興センター」を兼ねている。まちづくり委員会は地域事情に合わせて組織され（文化委員会や環境委員会など）、町内会や竜丘公民館の説明では分館から委員会役員が選出されている。各公民館に行政職は公民館主事が1名サポート役としては配置されており、上久堅公民館の林主事は「学校への相談や協力依頼、地域の皆さんと一緒に悩み、考える」、竜丘公民館の吉川主事は「住民との対話から地域を知る、対話の場、機会をつくる。」ことを役割と意識していると話していた。ここでもあくまで職員はサポートに徹していて、住民の主体性を強調されていた。20ある公民館ではそれぞれで「館報」を発行している。竜丘公民館の羽生館長は公民館の果たす役割について悩んでいたそうだが、いただいた館報の内容を引用すると、飯田市でも進む人口減少により「自治機能が縮小すればその分を行政に委託せざるを得ず、税や公共料金の負担は増加する。つながりの薄れた社会には潜在的な不安が広がりやすくなる。こうした地域であっていいはずがない。多世代が集い無理なく緩やかに結び合う場、今後の地域社会のあり様をそう捉え、少しずつ前進したい。」そして「自治組織維持のために負担軽減を論じ合うことは必要。しかし、その先にどんな地域社会の姿を共有しているか、これを語り合える場と関係性の構築、これこそが公民館の果たす役割だと思う。」と結んでいる。今回の研修で各委員は「カルチャーショック」を受けたと思う。私も飯田市の取り組みを聞き及んでおり、こうした住民主体のまちづくりの重要性を認識していたが、百聞は一見に如かず。意見交換の時間で、私は思わず「（すべてではないが）こうして手弁当でやるというのが根室市ではまずありえない。」と言ってしまった。住民の役割と行政の役割の区分が認識や、住民自治が根付いているという文化のちがい、培ってきた歴史のちがいは大きい。人口減少と縮小、財政等を考えると「自分たちでできることは自分たちでやる」ことは避けて通れないのが私たち根室市も

含めた地方都市なのだと改めて思った。また、飯田市の各種取り組みの中では常に対話が行われていることが想像に難しくなく、今回帯同いただいた学習支援係長の西氏とも意見交換したが、私たちが根室市で実践していくためには少人数で構わないと思うが「対話」というものを積み上げていく必要を感じた。また今回、公民館組織のお話もいただいたが、形や仕組みが良いから取り入れようというのではなく、対話を通じて「その先にどんな地域社会の姿を共有しているか、これを語り合える場と関係性の構築」に時間をかけていかなければならないだろう。

鈴木副委員長

驚くべきは、飯田市民の地域自治、住民自治に対する意識の高さである。飯田市の由来は、鎌倉期の文献に残っている、共同作業で農業をする「結い田」と表記され、その名が今日に至っているとのこと。すなわち、古来より隣近所で協力し合う、結いの文化が今も生活の中に息づいているのである。地域住民自らが、地域づくりの主役として、主体的に関わる土壌がしっかりと残っている。

その中心となっているのが、20 地区すべてにある地区公民館である。地区公民館に所属する市の正規職員は主事 1 名（地区の規模によっては年度任用職員の配置も）。運営は基本的に地域住民。公民館は、地域住民の自由で主体的な学習（やりたいこと）を保障する場。地区公民館にはそれぞれ 5 件程度の分館があり、市全体では 103 件の分館が！

今回は、飯田市公民館と、地区公民館のうち上久堅と竜丘の、二件の地区公民館を視察。どちらも地域の特色を生かした、住民中心の取り組みが行われており、地域の課題に対して、自分たちで取り組み解決するという意識が強く感じられた。

翻って、根室市ではどうか。根室市でも最近、公民館担当職員の努力で、様々な取り組みが行われていると認識している。しかし、それが公民館活動として市民に認識されているのかは疑問。そもそも、市内に公民館が一つしかない現状では、「地域コミュニティの重要性」をいくら強調しても言葉でしかない。

どこから手を付けるべきか。いまさら、例えば歯舞地区や落石地区に公民館をつくるなどということは無理。であれば、まずは職員が積極的に地域に出向き、地域住民の困りごと、やりたいことなどをくみ取り、形にしていくことか。いず

れにしても、長い時間をかけて、焦らず、根気よく続けていくことが重要であろう。

本田委員

- ・飯田に根づくまちづくりの精神は、地域住民自らが地域づくりの主役として、主体的にかかわる土壌。みずからしようとする「自治の精神」とみんなとやる「協働の仕組み」。

- ・飯田市の公民館組織は、飯田市公民館 1 カ所、地区公民館 20 カ所、公民館分館 103 カ所。

飯田市公民館は、市全体の課題をとらえた事業、地域館への波及を期待するモデル事業、20 地区館の連携調整・活動支援、学習相談・学習情報の提供等を行い、運営経費は全て市費。

地域公民館（20 カ所）は、地区の課題や地区民の求める学習講座、文化・体育・広報・育成事業、分館活動に関する相談・支援、社会教育関係団体等に関する相談・支援、学習相談・学習情報の提供等を行い、運営経費は、市費と住民負担。

分館（103 カ所）は、区の課題や区民の要求に基づく講座、文化・体育・広報・育成事業、本館活動への参画・協力、区の各種組織との連絡調整・相互協力、サークル等に関する相談・支援等を行い、運営経費は住民負担。

- ・公民館の運営原則は、地域中心、並列配置、住民参加、機関自立の 4 原則。地域に着目した学習と交流を深め、「みつける」、「つながる」、「そだてる」、「実現する」公民館活動を通じて、誇りと愛着を持って住み続けられる地域づくり・人づくりを進めることが公民館の役割。

以上の説明をいただいた後、下記の通り、公民館活動や公民館事業を視察

- ・上久堅地区公民館事業として、公民館活動、取組事例について
- ・上久堅地区の公民館活動の事例として、上久堅を誇れるふるさと「最高の田舎」にしよう！をコンセプトに取り組まれたクラフトビール開発事業、食工房十三の里（とさのさと）のお弁当づくりについての立ち上げの経過や活動状況について
- ・竜丘公民館の組織と活動、公民館主事の実際の役割や取り組みに対する姿勢、委員活動の事例として文化スタッフとしての経験、取組を通して感じたこと等について

それぞれ、詳しくお話を聞くことができました。



上久堅地区公民館

クラフトビール

竜丘公民館での視察の様子

※ 飯田市の公民館活動が視察テーマでしたが、20 か所もの地域公民館、その下に 103 か所の分館があり、その運営が市民中心に行われていることに驚きました。

この仕組みのベースには、飯田市の地域自治組織制度の考え方があり、合併した町や村それぞれを大切にし、地域それぞれの歴史や文化等の特色を活かし、住民主体、住民・行政の協働による地域づくりを推進する方針のもと、公民館活動が重要な役割を果たしており、体系立て整理された組織づくりのもと、地域間の連携、場合によっては、いい意味での競争があり相互に刺激しあい、地域の活性化が図られ、それがまち全体の住民参加型、顔の見える市役所づくりにも繋がっているものと感じました。

根室市とは歴史的な背景もまったくちがいますが、今一度、まちづくりにおいて市民の果たすべき役割であったり、市職員の立ち位置（地域の中に入り込み共に活動する＝顔の見える職員）等について、考えてみる必要があります、また、ボトムアップスタイルの入口は市民側からの様々なアプローチであり、クラフトビールやお弁当の提供などの発想も市民側からのもの、そこに、行政も加わり、財源対策をはじめ、事業や取り組みの実現を協働で進めるスタイル、是非、参考にしたいと思いますし、行政とも協議していきたいと思いました。

また、飯田市の公民館が入る複合施設「ムトスぷらざ（「ヒト」「コト」「モノ」が集まる創造の場）」は、中心市街地の旧百貨店の再開発・再利用であり、行政だけではなく、民間・企業も加わったなかで整備され、図書館機能と公民館機能等が設けられた施設でした。

塩尻市の市民交流センター「えんぱーく」、そして、飯田市のムトスぷらざ、

これらの整備のプロセス、市民参加のアプローチ、官民連携のスタイル等を参考に、根室市としても、グランドデザインに示されている商工会議所の移転等民間活用に関する取り組みや市街地の活性化等を意識し、施設の複合化、中心市街地の賑わい創出等をキーワードに、今後、検討する必要があるものと考えました。

富川委員

飯田市の公民館、ムトスぷらざで、住民主体による地域密着型の運営、専門委員会制度、分館制度を大きな特色としていることを学びました。

上久檜公民館では、過疎化、高齢化が進む中、食工房十三の里を立ち上げ、弁当や食パン作りを始め、クラフトビールを開発販売し、積極的に街作りに取り組んでいました。

竜丘公民館では、専門委員が自ら考え、事業を企画実施し、市民大学講座、地区文化祭、人形劇フェスタ公演、二十歳の集い、を行っていました。

市内20地区に地区公民館が配置され、それぞれの地域の特性や歴史に合わせた交流の場を提供していました。

永洞委員

飯田市の地域自治組織制度（公民館活動）について

長らく北海道住人であると公民館活動は町内会的なイメージしか持っていなかった。

実態としては町内会を含めて市内を20区域に分けて地域住民の自治活動への参加を促し、地域住民の要望を細かく吸い上げる行政組織の一部でありました。

各公民館の役員たる地域住民の方々は、活発な活動が無償で行うのが原則で地域愛的な情熱には圧倒された。

ただ世代が変わるにつれ、活動疲れを感じこれまでの活動量を維持できるのかは、気になるところでした。

また、2か所の視察先で伺った内容からすると、20地域が同じレベルで住民自治の活動を行っているなら、飯田市民の皆さんが議会の存在意義をどのよう

に捉えているのか気になるところです。

高度な住民自治を展開する飯田市の公民館活動は驚愕するしかなかった。

理想としては根室市においても町内会活動をベースに、今回の研修先のようになれば良いとは思いますが、なかなか厳しいと思う。

阿部委員

・2日目はムトスぷらざにて、飯田市公民館の小林副館長と西学習支援係長から、飯田市の地域自治の取り組みについて詳しい説明をいただきました。

飯田市では、人口減少や少子高齢化によって地域の力が弱まることを課題として捉え、住民が行政の意思決定に参加しやすく、行政と住民が協働してまちづくりを進められる仕組みを整えています。こうした考え方を条例として明確に位置づけている点が大きな特徴です。まちづくりの根底には「ムトス」の精神があります。これは「自ら行動しようとする意欲」を尊重する考え方で、住民が主体的に動くことを行政が支える姿勢を表しています。地域自治組織の再構築にあたっては、行政が上から指示するのではなく、住民の活動を後押しする“ボトムアップ”の仕組みが重視されていました。

飯田市では、公民館に所長、保健師、公民館主事、職員が配置されており、地域の拠点として機能しています。住民と行政が日常的に顔を合わせ、協力しながらまちづくりを進めている姿はとても印象的でした。また、公民館で働く主事の研修会や館長の定例研修、高校生向け講座など、人材育成にも力を入れており、飯田市ならではの工夫と努力が随所に見られました。さらに、飯田市は「人形劇のまち」として全国的に知られています。1979年の国際児童年をきっかけに、「子どもたちに夢と希望を届けたい」「全国規模の人形劇の祭典を開きたい」という思いが重なり、全国から人形劇を愛する仲間が集まりました。現在では、市内約100会場で上演される大規模なフェスタへと発展し、人形劇人のパレードやウィンドー人形展など、カーニバルならではの企画が次々と生まれています。参加劇団数や観客数も年々増え、全国に誇れる伝統文化として根付いていることを強く感じました。

こうした文化や伝統を大切にしながら、住民参加と行政の協働によってまちづくりを進めている飯田市の姿は、根室市にとっても大きな参考になると感じました。根室市にも、さんま祭りやかに祭りといった魅力的なイベントがあります。

これらがさらに全国に広まり、根室の魅力がより多くの人に伝わっていくことを願っています。

●上久堅公民館（人口 1073 人小学校 4 2 名）

小規模ながら、子育てをしながら人口減少が進む状況にあります。こうした中で、住民同士が地域の魅力を改めて見つめ直し、クラフトビール事業などを通じて地域ブランドを発信する取り組みが始まっています。

また、65 歳以上の高齢化率が 48.3%に達し、コンビニや食堂がない不便さを抱える一方で、各家庭には食べきれないほどの野菜があるという地域特性を生かし、女性たちが集まって受注生産のお弁当づくりを始めました。健康的でバランスの良い食事の提供は、スタッフの居場所づくりになるだけでなく、高齢者への見守りや声掛けにもつながり、住民にとって欠かせない支えとなっています。さらに、月に一度の食パンづくりも好評で、地域の楽しみとして定着しています。こうした取り組みは、「あるものを生かし、ないものは工夫する」上久堅らしい住民力を示すものであり、過疎化が進む地域における新しい暮らしの形をつくり出しています。

上久堅公民館で進められている取り組みは、根室市にとっても「人と人が支え合う地域づくり」を考えるうえで大きなヒントになるように感じました。何か地域のために力になりたいと思う方々が、高齢者への見守りや声掛けにつながっていく。その積み重ねが、過疎化が進む地域においても安心して暮らせる環境を育てていきます。住民一人ひとりの思いが、地域のあたたかさを守り、未来へつないでいく力になっています。

●竜岡公民館では、職員の方が「学習と交流を通じて人づくり・地域づくりを進める場」としての役割を大切にしながら勤務されています。活動の主役はあくまで地域住民であり、職員自身も住民と一緒に楽しみながら、伴走者として寄り添う姿勢を大事にしているとのことでした。個人の生活を重視する現代において、公民館の存在意義を改めて考えながら日々の活動に取り組んでいるそうです。また、竜岡地域には日本最大規模の人形劇団が集まり、人形劇フェスタ（カーニバル）が開催されるなど、江戸時代から続く文化的な基盤を生かした活動が行われています。長野県は山間地で夏は高温になるという印象がありましたが、公民館にはエアコンがないと伺い、地域の環境の厳しさと工夫しながら活動が続け

ている様子に驚かされました。

工藤委員

基本情報：長野県飯田市：人口 93,858 人（2025 年 8 月末現在）森林率（全市域の 86.4%）鎌倉時代の文献に見られる共同作業『結い田』に由来して『飯田』の名称が生まれたとされる。市の名称にあるように、「協働性を大切に育みつつ、発展してきた歴史が自治の基本的な考え方の根底」となっており「地域住民が地域の主役であり主体的に関わる土壌」をもっている。

また、飯田市は 20 地区が合併を繰り返しており、合併の都度旧町村単位に自治振興センターと公民館を配置している。この自治振興センターと公民館は地方自治法上も、「地域自治組織に関する合併の特例として、飯田市内の一定の区域を単位として、地域自治区を持つことができ」ており、特別職を置けるほか、行政や住民との協働の推進を目的とする組織として定義され、地域のことを地域が自ら決めて実行する機能を持つ。各自治振興センター 20 地区は一括予算も持っており、地域住民のための自治ができています。

それらの土台となっている考え方は「ムトスの精神」～自ら何かしようとする・・・という飯田の合言葉であり、自治基本条例にも記載されている。つまり、住民の困りごとでできないことは、地域が解決を考えて、地域が考えても解決できないときはじめて行政を頼るというような流れである。

その困りごとを相談し、解決する方法をみんなで考える場所が「公民館」であり、地域の人々は行事や公民館イベントのみならず、子どもの頃から気軽に集まり、遊び、雑談し、そこで地域を知り、地域人材に出会い育成につながる。公民館の中で、自己実現を図るテーマを見つけ育っていく若い世代、活動を応援する先輩、シニア世代との連携で地域活性化や課題解決へ動く計画も生まれていく。（根室市の公民館についての考え方、いわゆる「趣味等の活動で借りる場所・活動の発信場所」とは大きく異なる点が印象的である）

【特徴】

公民館組織の役割の多さ

区 分	対象地域(住民)	主な活動内容	運営組織の体制	運営経費
飯田市 公民館 (1)	飯田市 (市民)	■ 全市的課題をとらえた事業 ■ 地区館への波及を期待するモデル事業 ■ 20地区館の連絡調整・活動支援 ■ 学習相談・学習情報の提供 ■ 20地区館の管理	○ 公民館長:1人 特別職非常勤 館長会の互選で選出 ○ 市正規職員:4人 副館長 学習支援係長 管理係長 市公主事 ○ 市年度任用職員:3人 社会教育コーディネーター 管理係(2)	市予算
地区公民館 (20)	合併前旧町村 (地区住民)	■ 地区の課題や地区民の要求に基づく学級講座 ■ 文化・体育・広報・育成事業 ■ 分館活動に関する相談・支援 ■ 社会教育関係団体等に関する相談・支援 ■ 学習相談・学習情報の提供	○ 市非常勤職館長:1人 ○ 市正規主事:1人 ○ 地区選出委員:45人 (平均) ○ 旧市5地区及び人口1万人以上の地区に管理係(市年度任用職員)を配置(11)	市予算 住民負担
分 館 (103)	近隣集落 (区民)	■ 区の課題や区民の要求に基づく講座 ■ 文化・体育・広報・育成事業 ■ 本館活動への参画・協力 ■ 区の各種組織との連絡調整・相互協力 ■ サークル等に関する相談・支援	○ 地域住民から選出された役員が中心となって運営	住民負担

* 視察資料より抜粋

財政支援制度が縦割りではなく地域に一括支給

縦割りであった補助金交付金等を廃止し「パワーアップ地域交付金」(20 地区で総額 1 億 5 千万円)として一括で地域に支給し、さらに会費を含めて運営費としている。これにより、ボトムアップで「地域のためにこれを！やってみよう！」が地域の相談で予算化でき活動しやすい状況。

市民と協働できる力量を備えた職員の育成、人材配置数

飯田市は 20 地区が合併を繰り返しており、合併の都度、旧町村単位に自治振興センターと公民館を配置している(通称「まち・さと・やま」に分かれている)。20 地区の自治振興センター(公民館)すべてに所長 1 名、保健師 1~2 名、公民館主事 1 名、また 15 の自治振興センターには一般職員 2~4 名が配置され、住民主体の協働・支援を行っている。

公民館の主事は若手職員を配置するルールとなっており、20 代後半~30 代の職員が自治振興センターの公民館主事として配置され、3~4 年その地域の一員としてどっぷりと地域活動や地域との対話を仕事とし、市民と協働できる力量を備えた職員の育成を行っている。

公民館主事会でモチベーションを上げる

若い世代の主事職は、経験が積まれると同時に辛い場面も多いが、仲間との連

携や切磋琢磨で成長できる集まりがつくられていて、人材育成のための仕組みが作られている。

全20地区で基本構想を策定している

10年単位で、各地区のキャッチフレーズと基本構想計画を住民自らが作り上げ、地域の主役は住民であること、地域を守るのも住民である意識を自然に持っている。この、基本構想や計画から全国に誇る天竜川の舟下りで心配されていた「河川側からのゴミ除去、枯れ竹伐採、竹筏下りの体験活動」などの住民活動を「天竜川驚流峡復活プロジェクト」が生まれている。

【視察した公民館について】

上久堅地区公民館 人口1,073人13の郷からなる地区で本館は職員だが、分館構成員はすべて地区住民である。キャッチフレーズ～公民館でメル友ママ友のような「〇〇友」を作ろう！！

ハマコミルサイクルという名称でひろめられている活動があり、地域に接点のない人がはまるものを探す→スポーツ、情報、たまり場、歴史文化、学習→誰かとつながっていく→私→私たち→社会へ（火まつり、自然体験、防災キャンプ、集まれ乙女講座caffe、地ビール）／食工房「十三の里（とさのさと）」では、過疎化でコンビニ・食堂が無いことから、地域の畑で採れる野菜を使い、住民が自分で食べる野菜で弁当を配食するサービスを行っている。昼食弁当をいただいたが、大変おいしく、野菜中心でバランスが良く、地域の方の優しさとつながりを感じた。

竜丘公民館 ざっくばらんな対談となった中で、実際に活動した方がどのように仲間になっていったかの体験を語ってくださった。最初は「面倒なことを頼まれたな」と思ったのが、いつのまにか地域のための楽しい活動とやりがいになり、世代を超えて交流につながっていったようで、どの世代も上の世代の方が若い世代を褒め見守りつつ、実力を発揮させている様子があった。この対談で「根室市民の普通と竜丘公民館を中心とする住民自治の普通」の違いを一番に感じたのは「市に委託すると・・・」と表現されたので、委託は市から市民がされるものだと思っていた私は一文に驚き、聞いたところ「住民ができることを市に委託（行政に頼る）すると、自分達の生活のクォリティが下がり、市民税も増え、地

域の力も衰える」というお答えをいただいたことである。

根室市の参考になる点について

地域の「となり組」「江戸時代からの結い田」など基本の文化の差が大きいですが、「住民は自分でできることを」という思いにこたえようとする「行政の姿」が理想であると思う。市役所の先輩が若手職員を育てるという意識だったが、住民が職員を育てる飯田市との違いを知り考えが印象に残った。

保坂委員

飯田市は、公民館活動が活発なことで有名なまちである。

この日はまず、ムトスぷらざにおいて、飯田市の公民館活動について、飯田市教育委員会飯田市公民館の小林和弘副館長から、以下のようなお話をうかがった。

飯田市においては、「自ら…しようとする」という「ムトスの精神」と、お互いに支え合い、何かやるときは一緒になって取り組むという温かな気持ちといった「結の心」から、地域住民自らが、地域づくりの主役として、主体的にかかわる土壌があり、自治の基本的な考え方は、住民ができることは住民がやり、住民にできないことは地域がやり、地域ができないことは市町村がやるというものである。そして、飯田市においては、公民館活動を通じて、この自治の基本的な考え方が実現されているのである。根室市も含めたたいていの地域では、地域課題の解決は行政任せで、住民自らが課題の解決に動くことはあまりないというのが現状で、この点が大きく異なる。

また、公民館活動は楽しくなければ続かないというお話もあった。しかし、当議員は、公民館活動のどこが楽しいのか、なかなかイメージができず、その答えを見つけることがその日の最大の課題となった。

ムトスぷらざで小林副館長のお話をうかがった後、上久堅公民館、竜丘公民館に移動した。

上久堅公民館では、住民の方からお話をうかがった。お話をうかがったのは、クラフトビールの開発事業などを通じて上久堅の活性化を図っている北沢昌子氏と、コンビニも食堂もない上久堅において、お弁当づくりをして、地域の方々にお弁当を届ける事業をする長沼昭子氏である。お2人のお話をうかがうと、地

域の課題を解決し、それでいて、やっていて楽しいということが伝わってきた。これが公民館活動なのだから、公民館活動が楽しいというのが実感としてイメージできた。

竜丘公民館でも、住民の方からお話をうかがった。お話をうかがったのは、下平文化委員長と中島氏である。下平文化委員長によると、当初は、公民館活動に積極的に参加したいというわけではなかったとのことで、「公民館活動が楽しい」ということと整合しないため、当議員は、困惑した。

しかしながら、下平文化委員長のお話をさらにうかがっていくと、公民館活動では、職場とは別の人間関係ができて楽しい、皆の役に立っている活動をするこ
とで、豊かな心になってきたという実感がもてたといったお話があった。

ムトスぶらざにおいて、小林副館長からお話をうかがったときには、よく分からなかったことが、上久堅公民館と竜丘公民館で、公民館活動を実践されている住民の方のお話をうかがい、当議員は、ようやく納得することができた。

もっとも、飯田市の公民館活動は、長い歴史のなかで培われた土壌があつてこそのもので、根室市でも同じことができるとは、とうてい思えなかった。